

# 近江における 元亀争乱

## ◎元亀争乱前史

永禄一〇年（一五六七）、斎藤氏の本拠稲葉山城を攻め落とす、美濃を手中にした信長は、足利義昭を将軍として奉戴するための上洛準備を進めます。上洛にあたり、近江を通過することは避けられませんが、北近江は浅井氏、南近江は六角氏がそれぞれ領していました。そこで信長は、浅井氏の同盟国である朝倉氏に異心を唱えないことを条件に、浅井長政の元にお市を嫁がせ、浅井氏と姻戚関係を結び、上洛時の後方の安全を確保しました。

永禄十一年には信長は軍をおこし、義昭を奉じての上洛を開始します。協力要請を拒否した六角氏は、上洛途上に箕作山城が攻め落とされ、六角承禎は本拠観音寺城を捨て甲賀へと逃亡します。難なく近江を通過し



浅井長政  
(滋賀県立安土城考古博物館蔵)



お市の方  
(滋賀県立安土城考古博物館蔵)

た信長は、上洛を果たし、義昭を将軍に奉ずることに成功しました。

ところが元亀元年（一五七〇）、信長は長政との誓約を破り、將軍義昭の上洛命令を拒否した朝倉氏の討伐を開始します。金ヶ崎城を攻め落とし、朝倉領国に攻め入ろうとした矢先、長政離反の報せが入ったのです。朝倉軍と浅井軍の挟み撃ちにあつた信長は朽木

## ◎近江における元亀争乱

### ・志賀の陣

志賀の陣は元亀元年（二五七〇）に、近江国滋賀郡内で信長と浅井・朝倉連合軍が争った抗争のことを言います。

戦いは元亀元年九月の坂本合戦に始まります。湖西地方を南下し京に迫った浅井・朝倉軍が坂本の町を攻め、宇佐山城守将の森可成が戦死したことから、信長は三好三人衆との戦いを中断し、急遽兵を京に戻します。そして



志賀の陣の舞台となった比叡山麓  
(三井寺付近から宇佐山城跡と壺笠山城跡)

信長が近江に入ると、浅井・朝倉軍は宇佐山城から兵を退き、壺笠山城などに陣取り、比叡山に立てこもります。

両軍にらみ合ったまま二ヶ月経過しましたが、堅田の地侍が信長に通じてきたことから、戦況は動きます。信長は堅田城に坂井政尚を派遣しますが、逆に攻められて坂井は戦死。堅田は朝倉軍の占領下となります。直後に足利義昭が両軍の和議斡旋のため近江に向かい、一二月一三日に和議が成立。約三ヶ月にわたつた志賀の陣は、両軍が撤兵して終結したのです。

### ・志賀の陣後の近江

元亀二年の比叡山焼き討ち以後、元亀三年に至つて、將軍義昭との確執、三好三人衆や本願寺との争いで畿内は敵だらけ、また近江では甲賀郡にこもつていた六角氏の攻勢で、これまで比較的安定していた南近江すら危険な状況となり、さらに東からは武田信玄の脅威が迫ってきます。そこで信長はこの状況を打破するために、近江全域の

谷を京へと命からがら帰還しました。この二ヶ月後に信長は徳川家康と連合して、浅井氏を攻めますが、この時有名な姉川合戦がおこります。戦いは激戦の末、浅井・朝倉軍が小谷城に敗走しますが、完全に攻め滅ぼされたわけではありません。そしてこれが、信長と反信長勢力の対決が近畿一円に拡大するきっかけとなつたのです。



姉川古戦場  
(中島省三氏撮影・「信長 戦国 近江」大津市歴史博物館より転載)

掌握に全力を注ぐこととしました。そして、浅井氏に味方する高島七頭と信長との争いが始まります。天正三年と四年の二度にわたつて、「木戸の城」と「田中の城」の攻防がありました。二度目の攻防で湖西地方は信長の手に落ち、小谷城攻略への大きな足がかりを得ます。信長はすぐさま小谷城を攻めにかかり、約半月後には小谷から敗走する朝倉氏を、さらに半月後には浅井氏を小谷城に攻め滅ぼしたのです。



安曇川河口上空から見た高島の平野